

親鸞における女人往生の一考察

廣岡郁

親鸞の教説における女人往生考察は、現代女性論（真宗女性学）を構築する上で大いなる視座を投げかける。従来の女人往生解釈は、歴史性（地域的、時代的背景）に伴い仏教の本来的原意趣を喪失した上で、女人往生（女人五障説・女人三障説・变成男子説等）を体系づけた。しかし、阿弥陀仏の絶対他力による救済論を説く親鸞浄土教において、従来の諸説解釈の位置づけを現代女性論は要請している。「女人」救済とは如何なる仕方において成立することができるか、その論理構造を明らかにすることが、現代仏教女性論（真宗女性学）を構築する際に最も中心的な眼目である。本小稿では従来の女人往生諸説解釈問題に触れて論考していかねばならないが、紙数制限より後日の機会に譲り(1)親鸞浄土教における真宗女性学構築の為の論理的基礎としての女人往生論、(2)現代女性解放運動における真宗女性学の位置とその意義の二つの論点について愚考を試みたい。

(1) 親鸞が掲げた女人往生の要綱とは、如何なる意味を示

すか。变成男子・厭惡女身と説示することを如何に理解し、第三十五願の誓願を領解したのか。親鸞の女人往生の基本的意味は、親鸞の往生義そのものに關わる問題であり、又それは往生即成仏と従来言われてきた成仏との關係のうちで真に把握される。信樂峻磨氏は、「親鸞は徹底して肉体の有漏性にこだわりそこに宿る煩惱・罪業を凝視しつづけていった。そしてこの煩惱・有漏なる肉体のある限り・涅槃を証しえたとはいえず、臨終の一念に至ってその肉体の命終・穢身の捨棄に即してこそ、はじめて成仏・涅槃の証果を成就することができる。その点親鸞に於いては、往生は現世今生において語られ、成仏は来世死後において説かれるものであった」と解釈される。氏が、身と心に言及する如く、第三十五願で誓われる女人往生は厭惡女身である限り、現生不退位の女人念佛者は何処までも成仏・涅槃を証しえたとは言えないが、現世において、「聞我名号歡喜信樂発菩提心」することで正定聚位に住し如来の生命に生きる。猶又、武内義範氏は、信仰

と身体性に関して、信仰は束縛の業を持つものの身体的自己を作り変える働きである。心身脱落でなければならぬ。

絶対者の『もし生れずば正覚をとらじ』という深き慈悲の招喚だけが、私の心身を作り変えることができる。と解釈される。親鸞は当時差別社会に生きる女人でさえ、『観経』・『阿

弥陀経』・『涅槃経』・『本願楽師経』等に基づいて、念仏行道を歩むものを「善男子・善女人」と表詮した。「善男子善女人、阿弥陀仏の声を聞きて光明を称著して朝暮に常にその光好を称豪して心を至して断絶せざれば、心の所願にありて阿弥陀仏国に往生する」と。(ss II-123) ある。「善女人」は、信心開発時に便同弥勒・如来と等しき者である。かくして、親鸞の女人往生教説理解は、厭惡女身でさえも便同弥勒・如来と等しき善女人として把握され得なければならない。

私は、如来とひとしき善女人を視座として、真宗女性学構築を試みたい。真宗女性学は、如何なる仕方で成立するのであるか。善女人を真に善女人たらしめる「如来と等し」の根本構造は、如何に解釈され得るのか。西田哲学の立場からその構造を理論化すると、武田龍精氏は『一切群生海のところに方便法身の誓願を信樂する』という宗教的実存において我々の行為は、一如によって自己否定的に自己表現められた一切群生海の根底における弥陀の自己表現し創造的に自己形成して行く行為にはかならない。そして、かかる一切群生

海の創造せられて創造するもの、即ち、作られて作るものとしての存在こそ、真実信心の行者であり、この創造的自己形成の存在こそ、『如来と等し』き存在であり、『真の仏弟子』と表象せられた、現実の歴史的世界において大乗的生命を生きる念仏行者である」と解釈される。

『唯信鈔文意』に、「法性といふ真如といふ一如といふ仏性といふ仏性即ち如来なり。この如来微塵世界にみちみちてまします。即ち一切群生海の心にみちたまへるなり」(ss II-630)とある。即ち、我々の内には如来が備わる。如来が備わるとは無限性が備わることであり、自己を超越する可能性に外ならない。何処までも働きの可能態というものが、人間の中になければならない。無限性は、有限者が無限に自己を超越する可能性を意味する。このことを可能にせしめる実存的契機は、人間が有限でありつつしかも生死的限定を超越するもの、究極的存在そのもの（無限的如来）への参与である。「如来微塵世界にみちみちてまします」とある如く、生死を超越する可能態となることであるが、生死を超越する可能態そのものが、実は、如来が、「微塵世界にみちみちてまします」ところを基盤としている。そのことは、大悲の根源底である諸法体相そのものに我々衆生が参与していることに他ならない。かかる参与こそがまさしく普遍的法 (Dharma) の開示であり救済の成立根拠となる。従って、「如来と等し」と

は、救済の根拠である普遍性の可能態と等しいものとなる無限的可能態（西田的には、所謂「周辺なき無限大なる球の動的焦点」）に生きることを意味する。換言すると、それは生死界という歴史の真ただ中であって、歴史を超越する根源態に立脚した、真の人格的存在者として生きることを意味する。真の人格的存在者として生きることは、「即得往生は後念即生なり。」「又必定菩薩と名づく也。」（『愚禿鈔』卷II-460）とある如く、必定菩薩として女人菩薩道を歩むことでなければならない。

(2) 如来と等しき善女人たる真宗女性は、上記の意味に於いて歴史的存在者でなければならない。歴史の創造者として存在しなければならない。先に考察した「生死界という歴史の真ただ中であって、歴史を超える根源態に立脚した、真の人格的存在者として生きる」念仏行者として捉えた如来と等しき女性存在についての根源的原理論が、現代女性解放運動における真宗女性学構築の根本的視座となる。何故なら、現代を生きたとは真の人格的存在者が歴史を創造すること、他ならないからである。では、歴史を創造することつまり現代に信心に生きる真の人格的存在者たる真宗女性学は、如何に構築形成されるであろうか。信心開発の人間存在としての真宗女性存在は、真実なる人間存在である以上男女両性を根本契機として構成される人間社会においては、男性存在は女性

存在との人格的対立と統一、又同様に女性存在は男性存在との人格的対立と統一という絶対矛盾を媒介とした弁証法的関係において、はじめて男性は真に人格的男性として、女性は真に人格的女性として歴史的存在たりうるのである。西田は「人格の発展」に関し、「人類という典型よりみたならば、個人的男女は完全なる人ではない。男女を合した者が完全なる一人である。（中略）人間は肉体においても精神においても男性的要素との結合より成った者である。両性の相愛するのは、この二つの要素が合し完全なる人間となるためである。

男女の両性が相補うて完全なる人格の発展ができるのである」と捉えたことも以上の意味に他ならないと思われる。従って、真宗女性存在は、現代という歴史を創造すること（男女両性を根本契機として構成される人間社会）においては、男性との弁証法的相関の生命の創造的展開の中ではじめて歴史の実在となる。かかる視座において現代女性論方法的展開が形成されると考える。かくして現代に於ける男女の歴史的發展にあっては、信心開発せる如来と等しき善女人のうちに、女性の真の全人格的存在が成立する根拠を捉えることが、現代における女性解放運動とも対応出来る真宗女性学・仏教女性論たり得ると言えよう。（註略）

△キーワード▽

女人往生、如来と等し、真宗女性学

（龍谷大学大学院）